

釣りに釣られて

高原英夫

第十七回 「羅針盤がない！」

六月のある日、それはもう二十数年前のことだ。あのAさんとTさんと三人であちこちの港の岸壁で投げ釣りを楽しんでたのだが、たまには船でカレイ釣りをしようということになった。Tさんが浅虫のどなたかと話ができるということ、その線から船を仕立てることとなった。

もちろん当日は、私が運転役を引き受け、二人をそれぞれ迎えに行き、拾い、浅虫に着いた。そこはいま見るとなんのことはない。浅虫に来た観光客を相手にした遊覧船用の船着場だった。ホテル松園のすぐ隣のあの場所だ。

私も八戸以来の久々の船釣りに期待の風船はパンパンに膨らんでいたが、船に乗って準備している間、二人の動きをまどろこしく思いながらも、いたって平静を装った。

まずは真ん前の湯ノ島のまわり、そして東側へ移り、鷗島のまわり、土屋の前沖、その辺をやれば、帰りには十分な釣果と満足感がクーラーを満たしているはずだっ

た。湯ノ島には船で渡り、磯釣りをしている人がいる。その人達がいくら投げても届かない、そのむこうで糸を垂らす。何か上位に立つた様な、なんのことはないのだが妙な優越感がある。「せいぜいガンバレよ」と簡単に言えば、そんなところがあった。

しかし、たまにマガレイはくるものの、あたりがあると思えばコチ、あのヌメリのすごいやつ連続だった。

最初からのシナリオどおり、東へ移動していくものどこへ行ってもその調子は変わらなかった。そうこうしているうちに、今思うと双子島の沖で釣っていたのである。

その日は日曜日で、確か田代平だったと思うが、会社の組合のレクリエーションが行われることになっていたのだが、あえて釣りを選んだのだった。実際、天気は文句のつけどころが無く、暑いくらいで、釣りながら八甲田の山中での賑わいを思いつつ、さあ次こそはでかいカレイをと思いつつ釣っていた。

十時をまわったころだろうか。俄に厚い雲が空を覆いはじめた。真つ青だった空

が真つ黒になり、気温はすうつと涼しくというよりいきなり下がり、寒ささえ感じたかと思うと、ボツボツと大粒の雨が叩くように降り出した。さつきまで下北半島までも見えていたまわりが乳白色の霧に完全に包まれていた。まるで何も見えない。その間、何分だったのだろう。そこへ当然のように雷が鳴り始めた。閃光と一瞬もおかないうちにドガンと雷鳴が轟いた。真上で鳴っている。あまりの急展開に三人は竿をかたづけける間もなく、ただ雨をしのごとと操舵室のまわりに背をピツタリとくつつけているしかなかった。

まあ、これはないことではないが、この話のおもしろい？のはその船頭さんの行動なのである。

雷の中、船自体が避雷針そのものと思えばいい。ましてや竿などそのままぶつ立てたままなど考えなくたって誰でもわかる話である。

年格好は六十過ぎだろうか。船頭さんはともかく慌てた。色を失った。ただただ「戻る」と言うだけなのである。いや、戻るにしても浅虫よりは近くの港へとか雨宿りできる所へさえ行ければいいのであって、それだって雷にとつては事態がさほ

ど変わったというほどのことではあるまい。ともかくあつちが陸地だというのでそこへ向い始めたのである。というのも深い霧の中で三人、そして船頭さんが目を凝らしてあたりを見回していて、誰かが「陸が見える」というのでよく見ると、それはホタテ漁用の黒い浮玉なのである。それほどまわりの状況が見えなかった。船頭さんはともかく自分の思う所の陸へ向って舵を向け走り出したのだった。

数分もたたないうちに、進む向こうからエンジンの音が遅しく聞こえてきた。

「おおい、止ってくれ」

大きな声で船頭さんは叫び続け、その声を通じ、目の前にこちらの何倍もある漁船が霧の中からぬうつと姿を現した。

「浅虫さ、帰りたい。連れていってくれ」

「浦田さ帰るぞこだ。そつちさ行くのだつたらついてくればいい」

さつき漁船は前から来たと書いた。つまり我々の船はまったく逆の下北半島の横浜町あたりに向って走り出していたのである。GPSなどどこにもあるはずの無い頃のこととはいえ、羅針盤さえも無かったのである。あげくのはて、その船頭さん

は何を血迷ったのか

「船を繋いで引っぱってくれ」

そこまでいうのである。エンジンが故障したわけでもあるまいし、後ろをついていけばいいだけの話である。もう乗っていて情けなくてどうしようもなかった。さすがにロープで繋ぎはしなかったが、漁船の後を追いかけた。霧も少し薄くなり、右手に岩が見えてきた。見覚えのある形それは双子島だった。船頭もここで、この先は自分で思ったらしく、漁船に札を言い、双子島に船を着け、みんなで降りて、しばらく岩場の下にもぐり込み雨をしのぎ、天気上がるの待った。

なんのことはなく、そう時間もたたないうちにすつかりと元の晴天に戻った。つまりは前線が上空を通り過ぎたのである。ではではとゆつくり釣りを再開しようとして船に戻ったのだが、船頭さんはまだ「浅虫へ帰る」と言ってきた。もう西の空は何の心配もない青空になっている。湯ノ島の前ならばと妥協し、そこまで戻り、島の東側で糸を垂らした。行く前にやった時はまるでダメだったのに、今度は少し型の良いのがそれぞれ数匹釣れて、その日は終わった。

でも、しかし、だが……まったくもって恐れ入った。釣りと観光船、何時間も沖にいたのと、二、三十分くらい前の島のあたりを回り景色を楽しみ帰ってくる。同じ船に乗っているとはいふものの、自然の海の上に浮んでいるのである。道路のように舗装されているわけでもない。道はどこかに通じているが、海はどこへでも通じているようで、標識もなくどこにも通じていない。

そういえば、その数年前、八戸にいたころ、階上から船を出してアブラメ釣りに出かけた。電話のやりとりだけで、こちらは四人、港に着いて船を見た。その辺で昆布でもとるのかと思うほどの小舟だった。それでも四人は乗った。近い所でやればそれでいいのだ。ところが、その小舟は東の沖へどんどん進むのである。目の前を天を突くようなコンテナ船が横切る。大波でこっちは揺れに揺れ、しかもその船跡を突っ切つてその向うへと進む。もう頭の中は「心配」の二文字で書き染められていた。ただその時、その船頭、漁師さんは、直径三十センチはあろうかという羅針盤をどこからか取り出して、固定されているわけでもなく持ち抱えながら

「これがあれば安心だすけ」

みんなの不安に答える様に言い放った。すくと気持ちが悪く落ちついた。

その日は三十リッターのクーラーがいっぱいになった。その日、船に乗ったらもうひと回り大きいクーラーでなくてはと思い、まもなくそれを入れた。

もうひとつ八戸での話し、社の先輩のOさんと深久保から島渡しをしてもらい釣ることになった。Oさんは十和田からやつてきて私を乗せて深久保へ行った。その日は同じ舟に他の客もあり四人で乗った。島はほぼ海岸沿いに南にあり、白い布を振ると迎えにきてくれるようになっていた。アブラメを主に他の組にはとてつもなく大きなカレイが釣れた。しかし波も高く早めに布を振った。さすがだ、すぐ来た。岩肌には波が打ちつけ白い泡が敷きつめられた中を小舟は北の港へ向った。

「あれえ、おがしいな」

なんとエンジンが止まった。すぐ目の前には岩が見えている。舟が打ちつけられ砕けるのが見えた。四人は自然と自分の手を伸ばし海面を掻いた。しかし、指先がわずかに触れるだけで何の役にも立たない。つぎに、それぞれがロッドケースを取り出し、それで漕ごうとしたのである。それとて何センチ前へ進むというのだ。半

分諦めた。

その時、沖から同じような小舟が大波に見え隠れしながら近づいてきた。

「おおい、助けて〜」

同じ港の舟なのだろう。

「アブラ無くなつた」

こちらの船頭はそう伝え、小船に曳いてもらい港に戻った。おおい大丈夫かよお！ ガソリンがなくてはただのお碗だぞ。

まずもって、漁師は自然、もう少し具体的にいえば天気、それを読む。観天望気という言葉もある。釣り人は知っているようにいて、いたって素人なのだ。月に何度かの積み重ねはあるとはいうものの毎日ではない。

船の上に自分の命を預ける。これは相当な釣り人であっても毎日ということではあるまい。その数少ない機会が命のやりとりであってはかなわない。船頭さんはその意味でも本当のプロでなくてはならない。

今でも船に乗る時、あの浅虫での経験が蘇り、頭の隅で「この船頭大丈夫かよお」

と呼びかける自分がある時がある。

平成
23
年8
月